

令和 4 年 5 月 25 日現在

機関番号：32633

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H06350・19K21433

研究課題名（和文）食支援を受ける摂食嚥下機能障害高齢者の自己評価式QOL尺度の開発とNSTへの適用

研究課題名（英文）Development of a Self-Rated Quality of Life Scale for Older Adults with Dysphagia Receiving Food Support and Its Application to Nutrition Support Team

研究代表者

河田 萌生（KAWADA, Aki）

聖路加国際大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：30826194

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：【目的】本研究は、食支援を受ける摂食嚥下機能障害を有する高齢者のQOL評価尺度の開発を目的とした。

【研究成果】「高齢者への食支援」の概念分析を行い食支援によって影響を受けるQOLの範囲を検討し、2名の介護福祉士へのインタビュー調査を行いQOL評価項目の生成を行った。概念分析の結果、食支援は多角的な支援でありながら共通して口から食べる喜びを支えることを目的としたものであり、地域の支援体制の確立がQOLと関連しており、家族介護者のQOLも評価する必要性が示された。インタビュー調査の結果、QOL評価項目として身体的側面10項目、精神的側面5項目、社会的側面3項目の全18項目が生成された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、これまで明らかになっていなかった「高齢者への食支援」という概念の理解が深められ、食支援が高齢者のQOLへどのような影響を与え得るものであるのか知見を得ることにつながった。また、インタビュー調査により実臨床で起きている、摂食嚥下障害を持つ高齢者の食支援によるQOLの変化が言語化され、QOLの評価項目の生成に至った。

研究成果の概要（英文）：【Objective】 The purpose of this study was to develop a QOL evaluation scale for older adults with dysphagia who receive food support.

The scope of QOL affected by food support was examined through a conceptual analysis of "food support for the older adults," and QOL assessment items were generated through an interview survey with two certificated care workers. The results of the conceptual analysis indicated that food support is multifaceted but commonly aimed at supporting the joy of eating by mouth, that the establishment of a community support system is related to QOL, and that it is necessary to evaluate the QOL of family caregivers as well. As a result of the interview survey, a total of 18 items were generated as QOL evaluation items: 10 items for physical aspects, 5 items for mental aspects, and 3 items for social aspects.

研究分野：看護学

キーワード：概念分析 食支援 高齢者

1. 研究開始当初の背景

高齢者の摂食嚥下機能障害の有病率は15%程度と推計されている¹⁾。その主要因は、在宅医療のコモンディゼーズである脳血管疾患や認知機能障害などの中枢神経障害に加え、加齢に伴う筋力低下、低栄養に伴うものであり障害の完全な回復が困難となることが多い²⁾。よって、障害の完全な回復を目指すのではなく、障害が併存しながらも経口的な食物の摂取を可能な限り継続できる支援が求められる。そこで近年、経口的な食物の摂取を支援するために「食支援」と呼ばれる食物形態の調整や食事介助方法の工夫、食事環境の調整など包括的な取り組みが看護師のみならず、医師、歯科医師、栄養士、言語聴覚士、介護士などの幅広い専門職から学際的に報告されている^{3) - 12)}。

高齢者では、食べることが生活の中で大きな楽しみであるため¹³⁾、摂食嚥下機能障害のQuality of Life (以下QOL) への影響は大きい。我が国の219名の高齢者を対象にした「在宅高齢者の口から食べる支援の在り方に関する調査研究事業」による報告書¹⁴⁾では、要介護認定を受けた者では、自立、要支援認定を受けた者と比較して食事を「楽しい」と感じている割合は少なく、「ふつう」、「楽しくない」と回答する割合が高かったこと、入れ歯を使用している者や半年前よりも固い物を食べにくく感じている者はそうでない者と比べて食事を「楽しい」と感じている割合が低かったことが報告されており、QOLを高めるための食支援の開発が求められると考える。しかしながら、摂食嚥下機能障害を持つ高齢者における食支援の有効性として、栄養状態や身体機能を評価した報告は見受けられるが、精神面や社会面を含むQOLを定量的に評価したものは非常に少ない現状にある。その要因として、食支援を受ける摂食嚥下機能障害を有する在宅高齢者のQOL評価尺度が存在しないことが挙げられる。さらに、「食支援」の定義は未だ確立されておらず、「高齢者への食支援」という概念が説明する現象の範囲は非常に不明瞭であるため、食支援によって影響を受けるQOLの範囲も検討がつかない現状にある。

概念の理解を深める手法の一つに、Rodgers (2000)¹⁵⁾の概念分析アプローチの手法がある。Rodgersの概念分析は、概念はダイナミックに変化するものであり、文脈依存するものであるという哲学的基盤を持つ。そして、概念の社会文化的側面や学問領域間の比較、経時的変化を文脈を損なわない形で探究する手法であり、辞書的な定義づけを目的とするのではなく、概念の理解を高め、看護学や看護実践への示唆を得ることを目的とするという特徴がある¹⁶⁾。「食支援」の実践は学際的に取り組まれており、実践する場、対象、状況、時代背景といった文脈によってその支援の内容は変化していくことが想定され、「高齢者への食支援」の概念分析は食支援によって影響を受けるQOLの範囲を検討する上で有用であると考えた。

そこで本研究では、Rodgersの手法を用いて「高齢者への食支援」の概念分析の結果を基に食支援によって影響を受けるQOLの範囲を検討し、インタビュー調査により食支援を受ける摂食嚥下機能障害を有する高齢者のQOL評価項目を生成することを目的とする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、Rodgersの手法を用いて「高齢者への食支援」の概念分析を行い、実臨床においてこれまでどのように使用されてきた概念であるか明らかにし、食支援によって影響を受けるQOLの範囲を検討することである。さらに、食支援を行う専門職へのインタビュー調査を行いQOLの構成要素について分析することである。

3. 研究の方法

1) 「高齢者への食支援」の概念分析

①分析方法

Rodgers の概念分析法を用いた。

データ収集方法

英語のネイティブスピーカーによるスーパーバイズの下、「食支援」に相当する英単語が無いことが確認されたため、日本語による論文に限定し文献検索を行った。検索エンジンは、医学中央雑誌と CiNii を用いた。発行年は限定せず全ての論文を対象にし、検索式は「高齢者 and 食支援」として検索を行った。

医学中央雑誌では 123 件、CiNii では 47 件が同定され重複 19 件を除いた、151 件についてタイトルとアブストラクトレビューにより高齢者への食支援に論じていることを確認し、除外を 0 件と判断した上で 151 件全てを分析対象とした。なお、文献検索日は 2018 年 12 月 20 日であった。

文献選定方法

Rodgers (2000) では、各学問領域から 30 文献、あるいは母集団の 20%のどちらか大きい文献数をサンプルとすることを推奨している。学問領域別に文献を整理したところ、30 文献に満たない学問領域が存在したことから、母集団の 20%である 30 文献をサンプルサイズの目標とした。概念の多様性を探索するために、全ての学問領域を網羅できるよう、学問領域毎に乱数表によるランダムサンプリングを行い文献選定し全 37 文献が分析対象となった。

データ抽出方法と分析方法

選定した 37 文献の内容を熟読し、論文で扱われる社会文化的な文脈、対象者の属性をまとめた。次いで、高齢者の食支援の概念属性、先行要件、帰結および代用語と関連する概念を抽出し、分析のデータとした。Nvivo12pro を用いて抽出したデータを類似性に基づきカテゴリー化した。

2)食支援を受ける摂食嚥下障害を持つ高齢者の QOL の構成要素の検討

①研究デザイン

インタビュー調査

研究対象者

摂食嚥下機能障害を有する在宅高齢者に対する下記に示す食支援のうち、少なくとも 1 つ以上の経験が 3 年以上ある専門職者

インタビュー方法

半構成的インタビュー調査

分析方法

インタビューにて語られた内容を逐語録に起こし、食支援を受ける摂食嚥下障害を持つ高齢者の QOL に関する語りを抽出し、身体的側面、精神的側面、社会的側面から意味内容ごとに分類し評価項目を生成した。

4 . 研究成果

1) 「高齢者への食支援」の概念分析

①学問領域と代用語・関連概念

分析対象文献の社会文化的文脈は、地域・在宅ケア、施設ケア、認知症ケア、ターミナルケアという文脈の中で高齢者への食支援について論じられていた。対象属性は、一般高齢者、施設入所中の高齢者、認知症高齢者、終末期にある高齢者であった。対象学問領域は、歯学、看護学、医学、栄養学、リハビリテーション学、介護学、生活科学、人間科学、調理と多岐に渡っており、歯学で最も多くの報告があった(表 1)。

表 1 . 学問領域の割合

学問領域	全体 n(%)	分析対象 n(%)
	N=150	N=37
歯学	69(46)	14(37.8)
看護学	24(16)	5(13.5)
医学	23(15.3)	5(13.5)
栄養学	20(13)	5(13.5)
リハビリテーション学	6(4)	2(5.4)
介護学	5(3)	3(8.1)
その他	3(2)	3(8.1)

その他：生活科学、人間科学、調理

代用語と関連する概念について表2に示す。

表2．代用語と関連する概念

代用語	関連する概念
経口摂取への支援	栄養ケア
嚥下機能障害への支援	栄養支援 栄養管理 日常生活支援

概念分析結果

概念分析の結果、先行要件5項目、属性5項目、帰結3項目が抽出された。これらの結果を基に、概念モデルを図1に示した。

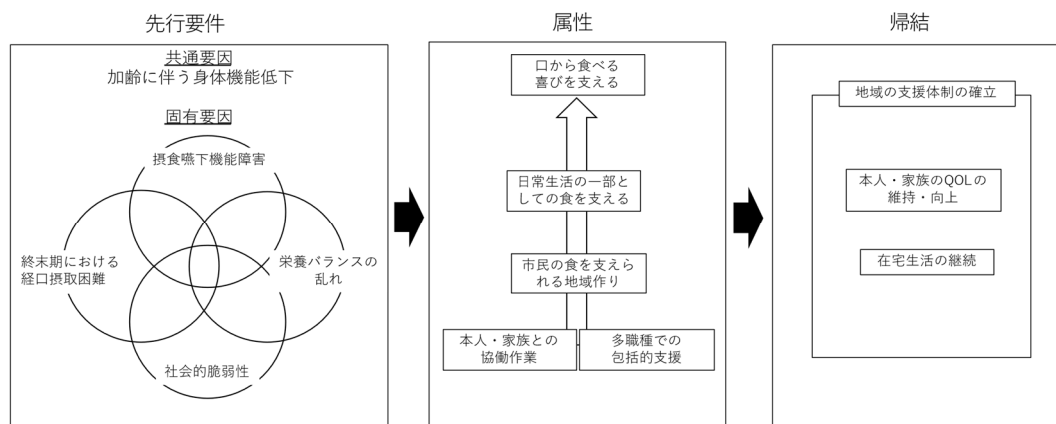


図1．「高齢者への食支援」の概念モデル

食支援により影響を受ける高齢者のQOLの範囲の検討

以上、「高齢者への食支援」の概念分析結果に基づき、食支援により影響を受ける高齢者のQOLの範囲について検討を行った。

食支援は対個人に行われる食事に関連した支援に留まらず、地域作りにまで拡大される支援であることから、地域の支援体制の要素をQOLの構成要素に含める必要があると考えられた。そして、本人のみならず家族との協働作業として行われる支援であることから、家族のQOLの要素も含める必要がある。帰結で示された、「本人・家族のQOLの維持・向上」に分類されたサブカテゴリでは、食支援を受ける高齢者のQOLは、身体的側面、精神的側面、社会的側面に分類され、特に「精神面の安定」、「口から食べられる楽しみや満足感の獲得」といった精神的側面、「人とのつながりを取り戻す」、「その人らしい生活を送る」といった社会的側面の要素について十分に含める必要性が示唆された。

2) 食支援を受ける摂食嚥下障害を持つ高齢者のQOLの構成要素の検討

①インタビュー対象者

インタビュー対象者は、A県の小規模多機能居宅介護施設の介護福祉士2名であった。介護福祉士としての勤続年数は、各々10年と16年であった。

QOL評価項目

インタビュー時間は、約 30 分間であった。インタビュー内容の分析の結果、食支援によって影響を受ける身体的側面、精神的側面、社会的側面の QOL の構成要素は下記のように抽出された（表 3）。概念分析の結果より（図 1）地域の支援体制という環境要因に関する内容はインタビュー内容から抽出することはできなかった。今後、施設数および職種を拡大しさらにインタビュー調査を行い評価項目を抽出する必要性がある。

表 3. 食支援を受ける摂食嚥下障害を有する高齢者の QOL 評価項目

領域	QOL 評価項目
身体的側面	落ち着いて食事ができる 口腔内の清潔が維持される 覚醒して食事ができる 栄養状態が維持・改善する ADL が維持・改善する 食事摂取量が増える 食事動作の自立性が向上する スムーズに食事ができるようになる 経口摂取が維持できる 家族介護者が食事介助ができるようになる
精神的側面	食べる意欲が向上する 不快感がなく食事を食べることができる 食事を美味しいと感じられる 本人・家族が食支援提供者を信頼している 家族介護者の介護負担が軽減する
社会的側面	在宅療養を継続できる 他者と意思疎通が取れるようになる 本人・家族と専門職との関係性が構築される

< 引用文献 >

- 1) Barczi SR, Sullivan PA, Robbins J. (2000) How should dysphagia care of older adults differ? Establishing optimal practice patterns. *Seminars in speech and language*. 21(4). pp347-361.
- 2) 山脇 正永 (2016) 高齢者の摂食嚥下障害とその食支援 *Geriatric Medicine*. 54(1). pp7-10
- 3) 箕岡 真子 (2016) 高齢者の食支援に関わる倫理的課題 *Geriatric Medicine*. 54(1). pp11-14
- 4) 津田 豪太 (2016) 摂食嚥下障害へのチームアプローチ *Geriatric Medicine*. 54(1). pp15-21
- 5) 金久 弥生 (2016) 食支援に関わる歯科衛生士の役割 *Geriatric Medicine*. 54(1). pp23-28
- 6) 青山 寿昭 (2016) 高齢者の摂食嚥下障害患者との関わり *Geriatric Medicine*. 54(1). pp31-34
- 7) 山縣 誉志江 (2016) 介護食の種類と特徴 *Geriatric Medicine*. 54(1). pp35-39
- 8) 和田 智仁; 徳地 正純 (2016) 口腔機能維持、栄養改善のための地域連携 *Geriatric Medicine*. 54(1). pp41-44
- 9) 梅安 秀樹 (2016) 北海道十勝での食支援のための地域連携 *Geriatric Medicine*. 54(1). pp45-48
- 10) 枝広 あや子 (2016) 認知症患者の食支援を見据えた歯科の関わり *Geriatric Medicine*. 54(1). pp49-52
- 11) 山田 律子 (2016) 認知症高齢者への食支援 *Geriatric Medicine*. 54(1). pp53-56
- 12) 後藤 理恵; 田中 志子 (2016) 管理栄養士の認知症への関わり *Geriatric Medicine*. 54(1) pp. 57-60
- 13) 加藤順吉郎 (1998) 福祉施設及び老人病院などにおける住民利用者の意識実態調査の分析結果 *愛知医報*. 1434:2-14
- 14) 公益社団法人全国国民健康保険診療施設協議会 (2016) 平成 27 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業 在宅高齢者の口から食べる楽しみ支援の在り方に関する調査研究事業 報告書 閲覧日 2019.5.6
- 15) Rodgers, B.L. (2000). Concept analysis: an evolutionary view, In B. L. Rodgers & K. A. Knaf I (Eds.), *Concept Development in Nursing: Foundations, Techniques, and Applications*. 2nd ed. (pp.77-102). Philadelphia, PA: W. B. Saunders.
- 16) 濱田真由美. (2017). Beth L. Rodgers の概念分析について: 哲学的基盤に基づく目的と結果の再考. *日本赤十字看護学会誌= Journal of the Japanese Red Cross Society of Nursing Science*, 17(1), 45-52.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 河田 萌生
2. 発表標題 Shoku-shien for the Elderly ; A Concept Analysis
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------